

「チセイノミ」 20 分

アイヌ 東アジア日本北海道二風谷における家の新築祝いチセイノミ N.G.マンロー
撮影 1934 年 6 月 復元 1992 年 (下中記念財団版)

主な内容

高所より見た二風谷と沙流川。萱野茂によるマンローの思い出。マンロー顕彰碑・夫妻写真。1934 年当時の集落。挨拶 (エカシ、女性)、イナウづくり、ヌサ前での祈祷、魔除・祝いの儀式、屋根裏に矢を放つ、女性の舞、男女の輪舞 (男性刀を持つ)、酒の準備、向い合わせに並んだ女性の踊り、エカシの踊り (手に刀)、鶴の舞、遊び (大人：寄りクジラ、ネズミの親子) など。

制作のバックグラウンド

N. G. マンローは、悪霊払いの儀礼、ウエポタラの研究を、二風谷における自分のアイヌ民族調査において最も重要な業績と捉え、その撮影に 5 年をかけた。が生前、遂に完成できなかった。1970 年代初め、公益財団法人下中記念財団は、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカへの収録を目指し、北大所蔵のマンロー関連フィルムを預かり、複製作業などを行ったが、92 年によろやく復元作業に取り掛かった。マンローが遺した 35mm フィルムが 2 巻 (北大登録 48683・48684) あるが、それは 1934 年 6 月にマンローの指揮下、大沢商会の 2 人のカメラマンが 2 台のアイモカメラによって記録したもので、悪霊払いウエポタラ自体と、マンロー邸の庭先に、その撮影のため建てられた撮影用のアイヌ家屋 = チセのために催された新築祝いチセイノミが記録されている。本作品は、家の新築祝いの部分を整理し構成したものである。没後 20 年して刊行された遺稿集「AINU Creed and Cult」原書の当該部分の検討を萱野茂と岡田一男で行い、遺稿集でも別項となっているので、切り分けを行った。この仕上げを行った当時は、遺稿集の日本語訳は未だ出版されておらず、国立歴史民俗博物館に所蔵されている関連写真群も参照できなかったが、大きな訂正を迫られる、事柄は今のところ指摘されていない。

音声と一緒に記録されていたらと痛感させられる内容であるが、撮影されたフィルムは、フル・フレームで 16 コマ/秒のサイレント規格である。撮影を担当した京都、大沢商会は当時、日本トーキー映画の先導的立場にあった。しかし、この問題についてマンローは英国王立人類学協会(RAI)に書き送った進捗報告書簡群には目立つ記述はない。

補足：マンロー自身撮影の 16mm オリジナルフィルム(北大登録 48670)について

1992 年に「復元作業」を行った時点と比べると、2000 年代に入ってからマンロー関連資料デジタル化プロジェクトによる英国における書簡資料群へのアクセス実現、歴博所蔵写真資料と英国王立人類学協会所蔵の写真群の照合、北大植物園・博物館所蔵映画フィルムの整理・再確認でマンローの映画への取り組みの実態がより明確になった。多くのヒントを与えてくれるのが、この 16mm 1 ロールで、マンローが単に長期にわたり自分で撮影し記録を続けただけでなく、職業カメラマンを招いて本格的撮影を行わせる際の非常用第 3 のカメラとして 16mm カメラを用意していたことが明らかとなった。

岡田一男

映像作家 株式会社東京シネマ新社代表取締役・公益財団法人下中記念財団評議員

1942年東京生まれ。1960年代モスクワの全ソ国立映画大学で劇映画演出を学んだが、当時よりロシア語を母語としない諸民族、シベリア先住民、中央アジア、コーカサス、沿バルト諸国の人々に関心を寄せて来た。帰国後、映像制作会社東京シネマで科学映画・TV番組自然誌番組などの演出・製作に携わり、1983年、東京シネマ新社代表取締役就任、現在に至る。1970年代はじめ、公益財団法人下中記念財団EC日本アーカイブズ設立に参画、ここで北海道大学旧蔵の1930年代アイヌ民族誌映像と関わりを持つ。1975年、二風谷マンロー邸庭先のマンロー博士顕彰碑除幕式に、手許に揃っていたマンロー関連16mmプリントを携え参列、萱野茂解説により平取町公民館で上映した。1992年、萱野茂とマンローの「ウウエポタラ」、「チセイノミ」復元版を製作した。2000年代には、歴博、内田順子の歴博所蔵のマンローのクマ送り映像の調査に協力し、続いてマンロー関連資料デジタル化プロジェクトに参画し、その知見により歴博研究報告168集「ニール・ゴードン・マンローの1930年代民俗誌映画への取り組み ウウエポタラ(悪霊払い)の記録を中心に」をまとめた。1990年より網走の北海道立北方民族博物館の北方圏全域の映像資料調査・収集に創館時より参画、現在まで協力を続けている。

連絡先： k-okada@tokyocinema.net